

ム勢力の参加なくしてはありえないだろう。民主制とイスラームの共存を目指す、新たな実験が始まろうとしている。西洋から押し付けられたと感じられている体制から、自分自身が選び取る体制、イスラーム文明を強く意識した体制へと転換しつつあるのだ。

西洋近代文明の一元的な支配が崩れ、それぞれの文明の長い歴史を自覚しながら、その伝統に即した新たな現代文明の構築が求められている。世界は伝統的な宗教文明を背景とし、各地域の民主体制が並存する多元的な世界へと変貌しつつある。チュニジアからエジプトへ、そして中東・北アフリカの多くの国々に広まるうとする変革は、こうした多元的な文明の並存による、新たな複合的グローバル世界への移行を示すものではないだろうか。

このように考えてみると、一見、まったく関係がないかのように映る東日本大震災と中東・北アフリカの民主化革命は、「文明の転換」という点で共通の人類史的転換点を象徴する事柄と見ることができるとも思えない。そして、それは宗教の新たなあり方と深く関

わっている。この特集はそのことをあからさまに唱え、掲げるものではない。

それぞれの出来事を地域的な事実にしてそれぞれに考えながら、日本の災害と世界の多元化がどの程度関係づけられるものかはあえて問わない。ゆるやかに関連しあう二つの問題を「文明の転換」という言葉でくくるにすぎない。

だが、読者の中でもし両者が結びついて感じられるとするならばそれで歓迎すべきことである。人類世界は一つであり、同時代の事柄が深いレベルで関わりあっていることは確かである。どのような意味で関わりあっているのかを同時代人が察知するのは容易でないにしても、相互の関連性を問うことは無謀であるかもしれないが、まったく無益なことと断定することでもないだろう。宗教を通して現代世界のあり方を考え、現代人の生き方を考えようとするところに、『現代宗教』の意義があると考えるところである。

(文責・島蘭 進)

特集 大災害と文明の転換

ポニョの海の中と外

「初源神話」の創出

はじめに

大災害の後には、それを連想させる場面を含む映画は上映中止になる⁽¹⁾。もし東日本大震災のときに『崖の上のポニョ』(宮崎駿監督アニメーション映画、二〇〇八年公開、以下『ポニョ』)が上映中であつたら、これも上映中止になるだろうと考えた人も多い。しかし震災後しばらく経つと、新聞や雑誌でも、今こそ読みたい、あるいは読みなおしたい作品といった趣旨の作品紹介が目につくようになった⁽²⁾。それらの作品は悲惨な場面を含んでいても、今日の状況を予言している、今こそ生きる力を与えてくれるなどと評されている。

わたなべ かずこ
渡辺和子

もちろんこのような読み直しは、神話や伝統宗教の文書においては常に行われてきたことである。しかし東日本大震災を契機として、被災者以外の人々も過去の辛い体験を思い起こして想像力を膨らませながら、作品再読の大きな潮流を創り出しているようにみえる。このような気づきと読み直しは、大げさにいえば人類の今後にとってますます重要になってゆくのではないか。本論では『ポニョ』の再考を試みて、無数にあり得る鑑賞者の『ポニョ』論の一つを提示してみたい。

「『ポニョ』のあらすじ

まずは筆者がまとめたあらすじを記すが、知りたくな

い方はとばしていただきたい。

海辺の屋の上に、宗介（五歳）の家が建っている。父の耕一は船に乗っていて不在が多く、母のリサは老人ホームで働いている。宗介は海岸で、ガラス瓶にはまった人面魚を見つけ、ガラス瓶を石で割って助けだすが、ガラスの破片で手にケガをし、血が出る。人面魚はその血をなめて傷をなおす。宗介は人面魚をポニョと名付けて、バケツに入れ、老人ホームのトキさんに見せると、「人面魚は津波を呼ぶから縁起が悪い」というが、宗介はポニョを守ると約束する。

海中にある家から家出していたポニョは、海中に住む人間である父フジモトに連れ戻される。しかしポニョが手足のある姿になりたいと願うと、両生類のような手足が出て半魚人となる。それは人間の血を舐めたせいであるらしい。ポニョは多くの妹たちに見送られて再び宗介のもとへと逃げ出す時、父が作った魔法の液体が海に流れ込んで異変が起き、月が地球に引き寄せられ、嵐と津波がおこる。ポニョはさらに変態して人間の姿になり、

というと、宗介は、「ポニョが魚でも半魚人でも人間でも好き」と答える。ポニョも魔法を捨てて人間として宗介とともに生きることを選ぶ。そしてグランマンマーレはポニョを泡の中にいれ、「地上にもどつたらこの泡にキスしてください。ポニョはあなたと同じ五歳の女の子になります」といい、「世界のほころびは閉じられました」と宣言して、ポニョの妹たちとともに海中へと去ってゆく。

二 災害後の『ポニョ』論議の例

自然破壊や環境汚染に対して警鐘をならすのが宮崎駿作品であるという先入観をもって『ポニョ』を見ると、いささか混乱させられる。そのせいか公開当初から評価が分かれた。

笠井／異監修『3・11の未来——日本・SF・創造力』（二〇一一年）に付された「3・11を考えるためのブックガイド」⁽³⁾には『ポニョ』を含む四十三編の作品が紹介されている。『ポニョ』については「執拗に描かれる海の汚染は文明への罰としての災害を、破綻したプロットは災害

巨大な魚のような波になった妹たちの上を走って宗介の元に来る。

人間になったポニョに驚きながらも宗介は再会を喜ぶ。嵐がやむと、リサは宗介とポニョを残して老人ホームの様子を見に車で出かける。宗介とポニョが目をさますと、水が床の高さまできて、あたりはすっかり水没している。おもちゃの船をポニョが魔法で大きくし、二人で乗り込んで母親を探しに行く。ポニョは魔法を使うときは半魚人に戻る。デボン紀の古代魚が泳ぐ海を船でゆくと、途中で多くの船に乗って山頂の避難所に向かう人々に出会う。二人は船を降りてトンネルをくぐってゆくとポニョは魚に戻ってしまう。そこにはフジモトがいて、ポニョを返すように迫るが、宗介はポニョをバケツに入れて必死に逃げ、老人ホームのトキさんに抱きとめられる。その後、海中に沈んだが、大きなクラゲに覆われた老人ホームに行き、元気に走り回っている人居者たちと再会する。リサと話し込んでいたポニョの母グランマンマーレが宗介に、「ポニョが人間になるためには、ポニョの本当の姿を知りながら、それでもいいという男の子がいる」

の不条理と、死者への喪を表現するものともいえる」と紹介されている。ここで「破綻したプロット」といわれるように、この作品の筋は確かにわかりにくい。もつともこの文章は、「ファンタジー派」とは相性の悪い「SF派」の人が書いたようである。確かに海の汚れのせいで、ポニョはガラス瓶にはまってしまうのであるが、この映画にはむしろ、生命の源としての海とその美しさも多く描かれている。

『現代日本のアニメ』⁽⁵⁾（二〇〇二年）の著作があるスーザン・J・ネイピアの二〇一一年五月に行われた講演「津波時代のポニョ 宮崎駿監督に問う」の抄訳が、上記と同じブックガイドに納められている。この講演は、「3・11の直後、あなたは『ポニョ』をどう思うか」という問いを宮崎監督につきつけるという意図でなされた。彼女は「著名な日本の芸術家たちのなかで、世界の終末を描いた作品にもっともこだわり続けているのが宮崎だ」というが、⁽⁶⁾『ポニョ』のメッセージは見えにくいと評する。そして宮崎が描く子供は、「ある意味で反動勢力である」という立場から次のように述べる。